

# 魚まち通信

発行責任者 魚まち歩観会  
会長 大橋 宏毅

- 魚まち通信目次・・・
- ・トピック
- ・魚まち紹介
- 【記念碑山登り口】
- ・魚まちあの人、この人
- 『魚まちガイド研修会』
- ・コラム
- 『旧江ノ浦橋と(むかえ)』
- ・名所を歩く
- ・ながしま弁で遊んでみたら?
- ・魚まち語録
- ・昔ながらの漁法・漁具
- ・味自慢
- ・歩観会の活動経過

## 魚お郷土資料館



購買入所の看板と大福帳  
大正時代の初めに使われていた。

**参加者募集**  
本年度も魚まち歩観会では、町づくりを応援して下さる方を募集しています。興味のある方は紀北町役場紀伊長島産業建設室  
7-1111  
※裏面にこれまでの活動状況や会の紹介をしています。

## 魚まち自転車始動

### レトロな自転車でも町並み巡り



「細い路地も気軽に」

の自転車と識別できるようにした。また、利用客へのガイドや申し込みカードなどを作成し、やつと貸し出しできる状況となった。

レトロな自転車は、町並みにもなじむ。また魚まちの細い路地にも入れるので、マップなどを利用し、興味を持った所へ気軽に行くことができる。町の人の触れ合いにも一役買いそうなので、町の人は、この自転車に乗っている人を見かけたら、ぜひ気軽に話しかけていただきたい。

5台の自転車の車体の色を紺色に塗り替え、タイヤの交換や壊れた部分の修理をし、自転車をよみがえらせた。管理先も決まり駐輪場の看板が用意され、自転車には歩観会のステッカーを貼って他

2007年4月25日、魚まちを訪れる人のためにレンタサイクル事業が始まった。これまで、古道客を町なかへ誘導し、町の活性化を図るため、さまざまな企画を打ち出してきた歩観会(あるかんかい)だが、駐車場の不足や紀伊長島駅からの距離などの問題もあり、気軽に足を運んでもらう方法を模索してきた。

## 陶板で魚まち紹介

第4回 記念碑山登り口 (岩壺・水神さん)



める場所は、ドウケ(松本)、岩壺(イワノコ・新町)、ドノコ(西町)など、限られていた。識者によれば、「コ」や「ケ」とは流水を溜める水槽の意味という。人々は水を家に持ち帰り、甕(かめ)に蓄え、大切に使用した。

水道設備が整った今日では想像し難いが、長島の人々は良質の飲料水に大いに苦労して来たのである。井戸水に多量の塩分が混じっていたからである。洗面水や風呂水が関の山。洗濯とて、石鹸の泡立ちが悪かったという。

飲み水は山から滴り落ちる谷水が頼りであった。汲

参考文献  
久保幸夫 著『魚まちガイドの手引き』

## 魚まちあの人、この人

### 三河屋のえっちゃんこと酒井悦子さん

えっちゃんは、美容師さん。嫁いだ昭和20年頃は、美容院は、長島に2軒しかなかった。今で言う『パーマ』は、当時『電髪(でんぱつ)』と言われ、タコ足のようなもので、髪を巻いていたそうです。これは、熱くて、においもきつかったといえます。『電髪』は、数人がかりで、例えば、お客さんが『熱い!』と言うと、うちわで扇ぐ係もいました。現在、パーマは2ヶ月に1回くらいですが、当時は、お盆と正月のみ。1度に

長島中の方が来るので、4、5時間待ちでも気長に待ってくれたそうです。こんな日は、朝から晩まで仕事です。その頃は、お風呂のない時代だったので、近くにあるお風呂屋さんへ、従業員に先に行ってもらい、自分たちが行くまで、時間を延ばしてもらっていたそうです。

また、その頃の結婚式は、とっても豪華で、白うちかけ、赤うちかけ、本振り袖、洋装、洋装(新婚旅行用)と5回替え、化粧も髪も全部替えていたそうです。でも、その頃が一番やりがいがあり、楽しかったといえます。えっちゃんは、絵も上手で、才能豊かな方ですが、今は、お店を開けているのが自分にとって一番いいそうです。常連客が集うお店として、未永く続けていた、だいたいです。

## 寺子屋式 長楽寺の本堂で講演会



3月28日、午後7時から、長楽寺の本堂をお借りして、小倉肇紀北町教育長の講師に招き、語り部講座の特別講演会が行われた。歩観会の会員など26人が参加。講師の小倉教育長は、最初、熊野古道について触れ、紀州・牟婁・熊野が時代ごとにどのように区分され、名前が変化していったか、黒板を使ってわかりやすく説明。

本題の「紀伊長島の四方山話」に入ってから、長島の「地名と姓」「山村と漁村の文化・民俗の差」「伝えられた民話」「西長島の古道」など、紀伊長島の歴史や文化に関して興味深いお話を聞かせてくれた。「人魚の口」や「たかぼっさん」「本ぬり」などの民話や伝承のころは、笑い話を交えつつ、そのお話の出来た背景について触れた。また、ご自身が姉に習い覚えたというおじやみ(お手玉)の数え歌を口ずさんだ後、歌のひとつひとつにその頃の生活が反映されており、悲しい出来事も含まれていたことを教えてくれた。参加者らは、お寺の本堂で座布団に座るといってもと違った雰囲気の中、教育長の話に熱心に耳を傾けていた。

『旧江ノ浦橋と「むかえ」』  
植村 岐穂子

長い間、江ノ浦湾のシンボルとして親しまれてきた旧江ノ浦橋。橋には開口部があり、片側だけが持ち上がった船を通り過ぎさせていました。大きな船になるとその傾斜はきつくなりますが、毎回マストがあたらないかはらはらしたものです。◆船が通過するとき足止めされた人たちは、知り合いと話したり、ただじっと見守ったりして待ちますが、中には橋が降りるのを待ちきれず、欄干につかまりながら傾いた橋をよじ登る「目立ちたがり」もいました。あぶないよの声が飛び交いますがへっちゃらで、観衆?もそんなことがあると飽きずに待つことが出来ました。◆ある日、私が橋を渡っている時にサンダルの片方を海に落としてしまい、途方に暮れていると、通りかかった若い漁師が、服をぬぎ、何のため命がけで網の中に飛び込むこともあるという海の男たちには、橋から飛び込むなどわけもないことだったのでしよう。◆当時の「むかえ(中ノ島)」は、人家も少なく、現在の栄町辺りは、まだ土地を造成したばかりで「うめたて」と呼ばれていました。真珠小屋へ遊びに行ったり大明神さん(鏡神社)の側では椎の実拾いをして遊びました。その近くに孔雀やタヌキ、猿、ウサギなどの動物が檻で飼われていました。いつも見に行く私に動物をさわらせてくれたあの飼いが、現在、大内山動物園の園長をしている脇さんだったと知ったのは、ずいぶん後のことです。◆旧江ノ浦橋は、昭和29年に竣工し、昭和63年に現在の昇降橋への架け替え工事が始まるまで、中ノ島の発展と海野への交通の便に重要な役割を果たして来ましたが、老朽化によりその姿を消しました。